

## ガラスの天井を割りながら



随 筆

一 柳 優 子\*

Shattering glass ceilings

Key Words: Global, Physics, Gender gap, Glass ceiling

### はじめに

昨今、グローバル化や女性活躍が謳われている。ここ数年、海外での大きな会議では、Women in Science などの女性集会が持たれる。筆者は磁性を専門としており、磁性関連の国際組織 IEEE Magnetics Society では Women in Magnetism (WiM) の Co-chair として、集会の企画やワークショップを開催している。グローバルジェンダーギャップ118位のわが国では、国関係の委員には必ず女性を入れるとか、大学に女子枠を設けるなどの動きもあるが、まずはこれまで女性に対してどのような待遇をしてきたか、振り返ってみることも本質的な対応になるのではないかと思う。筆者は2019年10月、女性で初めて横国大の工学系の教授になった。それまでには多くの壁や天井があったが、国際会議で世界中の研究者とコンタクトできたことで、精神的なバランスを保てたと感じている。同じ分野の研究者はライバルであると同時に、会った瞬間から友人になれる。学びや研究過程を共有しているため、互いの仕事の健闘を称える気持ちが生まれるからなのだろう。今一番の親友は、同じ物理出身で磁気微粒子の研究を主としているスペインの女性研究者である。

### グローバルな視野の形成は学部生から

学部4年と修士の2年間、横浜国立大学の故宮



\* Yuko ICHIYANAGI

横浜国立大学大学院 工学研究科 物質工学  
専攻博士後期課程 (1996年)  
現在、横浜国立大学大学院 工学研究院 物  
理工学ユニット 教授 博士 (工学)  
大阪大学大学院 理学研究科 熱・エントロ  
ピー科学研究センター 特任教授 (クロ  
スアポイントメント)  
TEL : 045-339-4185、06-6850-5525  
E-mail: yuko@ynu.ac.jp

田直憲教授の研究室で磁性研究を始めた。4年次の夏から一年間、文科省派遣でドイツ・ザールラント大学に留学することが決まっていたが、先生は快く送り出してくれた。また出立にあたり、黒沼ユリ子さんの書籍をプレゼントしてくれた。卒研を残し卒業のための単位は全て取り終わっていたので、ドイツでは経験として、いくつかの講義と実験を履修した。日本での学部実験は、その時間に説明を聞き、実験をして、レポートを書きながら、なるほどそういう実験だったのか、と理解することが多かったが、その習慣のまま赴くと、例えば「今日はニュートンリングの実験です。この原理について説明しなさい」と言われ、予習をしていなかった私はうまくドイツ語で説明できず「あなたは今日実験をする意味が無いから帰りなさい」と返された。一緒に組んでいたパートナーは何も出来ず、ただ「ごめんね、ごめんね」と恐縮している。無事実験が終わってからも口頭で確認がある。あるときは「交換相互作用 (Wechselwirkung) について説明しなさい」と言われ、この時も「説明ができるようになったら私のところに来なさい」と保留となる。日常会話は留学試験にドイツ語もあり、なんとかなっていたが、専門用語にはなじみが無い。当時、岩波の理化学辞典という分厚い書籍には、英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語での記載もあり大変重宝した。そして学生寮の物理専攻の友人に、文章を見てもらい、担当の先生のところへ行って説明した。先生は「そうだ、それがまさに交換相互作用である」と満足気に言われたが、そのあと「日本では女性が物理を専攻するのは普通か?」と。「普通ではないです」と笑顔で答えた。今、教える立場になると、よく個別に丁寧に時間をとってくださった、と改めて感謝する。このように学部時代にサバイバルしていたおかげで、今でもドイツ語は南なまりもしっかり入ったネイティ

ブ感覚を保っていると思う。もちろん、急激に忘れるが、国際会議参加やドイツ語圏からの研究者の来日などで、リハビリを怠らないようにしている。

座学の講義では、隣に座っていた学生が、黒板に書かれた積分の式の文字に不安があったらしく「ねえ、これ  $f$  ?」と聞いてくる。「そうエフ」と伝えながら、あんたドイツ人でしょ、と心で思うと同時に偏見の無さにも気づく。今でも海外の街中でよく道を聞かれたり、時間を聞かれたりする。日本で外国人に道を聞くことは考えにくいので、彼らの垣根の無さに文化の違いを感じるとともに尊敬する。

### 民間企業での経験

修士を出てから一度企業に入った。いろいろな部門に配属され、技術管理では機器の不要輻射対策を進めるとともに、当時日本にまだ規格がなかったコンピュータ関係の安全規格である VCCI をいくつかのメーカーで集まって議論し作成した。横浜から盛岡への転勤もあったが、ハードウェアの設計は比較のおもしろく製品も世に送り出した。ただ会社では他の女性と同様に、朝は机拭き、来客のお茶出しをしながらその打ち合わせに出席、などと立場が難しい。あるときは上司に呼ばれ「女性は自分をバカに見せろ」と言われ、混乱した。結局どのようにふるまえばよいのかわからなくなり3年弱で辞めた。海外勤務もしたかったが、女性にはその機会が無いと知ったのも辞めた理由の一つである。ここでは天井を割らずに別の出口を探すことにした。その後、企業の企画室にいたときに、私の提案コンセプトを絶賛してくれた野村総研の人が独立創業した事務所で少し働いた。その調査の中で大学の教務職員の公募を見つけて応募しアカデミックに戻った。当時は電算業務と学生実験補助が主で、上司の先生は宇宙線の専門であったが、やはり磁性分野にひき付けられ、博士の学位を取り直した。この過程でもいろいろあったが、ここでは割愛する。

### 研究仲間は最高の宝物

多くの研究者に会い、親しい友人を得られたことはとても幸せだった。日本で特に強い結びつきがあるのは、日米ナノテクノロジー若手研究者交流プログラム<sup>1)</sup> (以下“日米”)の仲間と、さきがけ研究の仲間である。日米では、日本と米国から各10名

ほどがシカゴに集合し、シンポジウムを行い、その後10日間ほど米国参加者の研究室を訪問してセミナーや議論をした。ここに集結した研究者は素晴らしく、社会性も優れていてとても尊敬している。当時、孤立を感じがちな助手だった私は、一日を終えると恵まれた機会に幸せを実感し涙が出た。ハードなスケジュールただけに、メンバーの結束も固く、今でも強い信頼関係にある。

さきがけ研究では、仲間にもアドバイザーの先生方にも感謝でいっぱいである。自分の研究費が得られること、海外出張も迷わず行けること、これが世界レベルの研究に接することが可能になったきっかけである。

国際会議で知り合った仲間や、ともに運営やプログラム委員を務めた同僚も、かけがえのない宝物である。海外出張をするのに経費が無いときは、彼女らの家に泊めてもらったりもした。

### 普通に生きるということ

私が女性として最も不利益を強いられていると感じるのは、同じ名前を一生名乗り続けることの難しさである。わが国では婚姻をする場合、どちらかの姓に統一しなければならない。そして95%が男性の姓に合わせる。それが当たり前と思っている人も多い。婚姻時にそれぞれの姓を選べない国はもはや世界中でインドと日本だけだ。さすがに118位である。別姓法案はいくら署名を集めても簡単に廃案にされる。研究者にとって名前を変えられたらどうなるだろう。これまでの業績は別人のものとなり新たに一から積み上げねばならなくなる。結婚後、数年が経ったある日、学内の科研費の採択一覧にこれまで旧姓のみで申請していたにもかかわらず、戸籍名と括弧書きの旧姓が記載されていた。私の結婚を知った事務官が気をきかせて修正したらしい。それを見た少し距離のある人たちから、結婚したのですね、と言われることがあり変な気分であったが、問題は交付申請のときに起きた。当然、今まで通り一柳優子で提出したところ、戸籍名に書き直せと差し戻された。それは困る、これまでこの名前で業績を積んできたのだから別の名前で申請はできない、とそのままお願いした。しかしその後、学部長室に何度も呼び出され押し問答になった。当時の学部長も「私も研究者だから理解できる、事務局には離婚でもし

たのではないかと、言っておく」と協力してくれたが、最終的には、なんと文科省が、言うとおりに書かないと大学一括して交付しない、と言ってきた。もう離婚するか戸籍名に書き換えるかしか方法がなく、離婚届を用意して、大学に署名を求めたが、誰も同意はしてくれるわけもなく、泣く泣く書き換えた(詳しくは2020年3月6日 毎日新聞電子版「声をつないで」参照)。

ちょうどそのころ、ウォール・ストリート・ジャーナルから別姓に関する取材があり、「In Japan, to Keep Your Maiden Name, You Get a Divorce (日本で旧姓を使用するには離婚)」の見出しで一面に載った<sup>2)</sup>。その記事を見た朝日新聞から取材を受け、朝日は文科省にも取材に行き、朝日新聞の記事を見た女性議員たちも動き、2001年3月の参議院予算委員会で議論され、翌年から科研費は旧姓のみで申請が可能となった。

せめて学内だけでも公文書に旧姓が使えるようにできないか、と有志で旧姓使用の同意を求める署名を集めた。他学部の女性教員も大いに協力してくれた。当時の工学系は9割以上が男性で、日ごろ研究上の話を交わす教員に声をかけると、すぐに署名をしてくれる人もいれば、意外にも思わぬ罵倒が始まることもあった。「同意しない」「男女平等なんて社会主義だけだ」最後には「(そんなことして)研究進んでるの?」とつけ加えられることも。信頼していた人たちに、がっかりというか青ざめる感覚だった。

海外出張も常にチャレンジである。航空券はパスポートと同じ名前にしてください、と言われる。例えば招待される時、或いは学会や論文の業績を見て「Prof. Ichiyangi」の名前で invitation letter をもらうのに、名前が違ったら VISA も取れないし、予約してもらったホテルで、そんな名前の予約はない、となる。支払いのクレジットカード名義も異なる。

これらの問題を解決しようと、パスポートに旧姓を併記してもらうため外務省と協議することになった。旧姓併記が必要な理由を書いて、業績リストを作り、冊子にして提出した。窓口では、理由が明らかなので認められると思います、と言われ、パスポートの旧姓併記が実現した。括弧書きではあるが、今では特別な理由がなくても、全ての希望者に旧姓併記が認められている。以後、航空券は旧姓のみで



2019年にスペインで開かれた磁気微粒子に関する学会の女性集会。筆者は前方でマイクを持つ。

発行してもらっている。ところがパスポートのICチップには戸籍名しか入っていないことがわかった。したがって毎回チェックインや入国審査ではひっきり、そのたびに、日本は遅れているんです、私はこの名前で行きます、と訴えたとすべての国でパスする。それでも気分は悪く、毎回大変なストレスである。

別姓法案に反対する議員の言い分は、また最高裁判長も、であるが、通称使用で回避できるというものである。マイナンバーに旧姓を併記すればすべての書類で通称が併記されるという。しかし現実には、通称は通用しない。保険証も、公的通知も、年金受け取りもほとんどの場合が、戸籍名を強いられる。印鑑証明については、区役所側は両方の姓で証明している、との立場を主張したが、陸運事務局から印鑑証明は戸籍名でないと受け付けられないと告げられた。別姓法案に尽力してくれている福島みずほ事務所や野田聖子事務所も、国交省に質問してくれたが、形式的な無意味な回答しかもらえなかった。結局、一度ペーパー離婚して自分の名前の印鑑証明を取るしかなかった。またも普通のことができず、時間と労力を大量に消費し残ったのはやるせないストレスだった。

2019年にスペインであった磁性の学会の女性集会では、「日本は先進国なのに、STEM分野で女性研究者の割合が低い。何が障壁になっているのか」と私が代表して質問を受け、それから各国の状況を報告しあった。同じ名前を名乗り続けるのは、研究上も重要であることが共有できた。結婚で改姓を強えられるのは、不利益が大きい。2024年のナノテクノロジーの会議での女性集会では、日本がそんな

状態だとは知らなかった、と結婚で改姓しなくてすむように政府に訴えるために、15 か国 38 名の人たちが署名してくれた。印象的だったのはパレスチナの人が男女とも、とても思いやりがあり、優しいことだった。

#### おわりに

かくの如くスタートラインに立つまでに、障害がたくさんある。多くの人の助けをお願いしたい。

委員会の委員や企業役員に女性を必ず入れるなど、見た目を整えることがダイバーシティとは限らない。ダイバーシティの本質を考え、一人ひとりの思いやりを心がけていただけるとありがたい。

#### 参考文献

- 1) 塚田捷、猪飼篤、固体物理 Vol.40,pp.449-455, 2005
- 2) The Wall Street Journal, June 29, 2000

